

ショパンの4つのマズルカ Op.33と その背景について

松 本 由美子

(白鷗大学教育学部)

目 次

はじめに	272
1. マズルカの由来	272
(1) マズルカとは	272
(2) 3つの舞曲の共通点	273
(3) 3つの舞曲の個性	273
(4) ポーランド語とマズルカ	275
2. ショパンとマズルカ	276
3. 「4つのマズルカ作品33」について	277
(1) 概要	277
(2) 曲の分析と解釈	278
おわりに	285

はじめに

ポーランドとショパンと聞いて、音楽関係者ならまずマズルカを思い浮かべるであろう。マズルカとは、ポーランドの伝統的な民族舞曲のことである。儀式をはじめとして様々な場面で演じられ、日常生活に欠かす事のできない舞曲として、古くからポーランドの人々の心と密接に関わりあってきた。マズルカには、人々の生活の中に深く関わり、人々の生き様や心情をせつせつと歌っているものが多く存在するからである。

マズルカは、ショパンが生涯にわたり最も多く作曲し、死の真際までずっと書き続けたものである。今回は、4つのマズルカ Op.33をテーマとして取り上げる。ヘンレ版（原典版）をもとにパデレフスキ版、ナショナルエディションを考察することにより、真の解釈と演奏法を提示したい。このことにより、ショパンの人物と作品をより深く理解する手がかりを見つきたい。

1. マズルカの由来

（1）マズルカとは

マズルカはポーランドの伝統舞曲であるが、それは、時代や歴史の中で豊かに発展してきた様々な地方の多様な踊りの総称のことである。実はポーランドではマズルカとは言われておらず、マズールもしくはマズレークと言われている。しかし本論では、混乱を避けるため、マズルカに統一することにした。

ポーランドで発祥したマズルカが様々な階層に広まり発展したのは、今からおよそ400年前、ポーランドの首都がクラコフからワルシャワに移った1596年頃からと言われている。もともとはマゾフシェ地方の農民達の間でもっぱら踊られていたが、やがてシュラフタ（士族）や貴族階級に伝わり、広く踊られるようになっていった。長い間、農民達の間で伝承されて

きたために、マズルカは大変、土俗的な色合いの濃いものとなっている。

ポーランドには、マズールの他にオクロングウィ、クーヤヴィアーク、オバーレクを始めとする多数の伝統的な民族舞曲があった。ショパンは、それらの中から比較的ポピュラーな踊りであったマズール、クーヤヴィアーク、オバーレクを作曲に取り入れ、マズルカとして世に発表したため、これら3つの舞曲の形態がさらに広く一般的になっていった。

(2) 3つの舞曲の共通点

マズール、クーヤヴィアーク、オバーレクは、いずれも、男女が大きなまわり輪を作り、さらに男女一組が対になってそれぞれ左右様々に旋回したり跳ねたりしながら踊る舞曲である。様々な踊りの形態により、踵を踏みならし、口笛やかけ声をかけて踊る等、大変土俗色の濃いものである。

それらに共通する特徴として、弱拍の2拍目と3拍目にアクセントがあらわれ、フレーズの最後では1拍目にアクセントが置かれることがあげられる。また、素朴な楽節を繰り返しながら即興的に発展していく曲が多く存在する。歌と踊りに合わせて、ドゥディ（またはコザ）と呼ばれる雄山羊の皮でできたバグパイプのような楽器や、ヴァイオリンとコントラバスに非常に良く似た弦楽器による、連続性のある低音伴奏音型（3和音の第3音を省略した5度音程の和音の連打）が繰り返される。全体として、3つの舞曲は大変即興性が高く、モチーフに対する様々な強弱による変化、テンポ・ルバートによるフレーズイング、音色の変化、様々な表情づけが特徴となっている。

(3) 3つの舞曲の個性

マズールは、ワルシャワ周辺及び中央部をさすマゾフシェ地方で、17世紀はじめ頃から踊られている3拍子の踊りの総称である。湖の多い平野で男女が楽しげに踊る、快活な速いテンポの舞曲である。大変男性的な勇ましい感じの曲調である。付点音符が多く使われているのも特徴で、メ

ロディーの中で付点のリズムが効果的に曲調を印象づけている。Mazurek Dabrowskiego 「ドンブロフスキのマズルカ」と呼ばれるポーランドの国歌は、このマズールの形態で書かれた曲である。

図表 マズールのリズム



クーヤヴィアークは、ショパンの生まれたジェラゾバ・ポーラのあるクーヤヴィ地方の踊りと歌である。1827年頃にこの名称が確立されたようだが、古くから踊られていたといわれている。テンポはゆるやかで、緩急を多く取り入れることにより農村に生きる人々の生き様をせつせつと歌っている曲が多く存在する。アクセントは、あまり強くなく、やわらかいアクセントもしくは、テヌートで演奏されている。ショパンは、母親が歌うクーヤヴィ地方の歌を子守唄がわりに聞いて育ったという。

図表 クーヤヴィアークのリズム



オベーレクは、ポーランドの南部山岳地方であるシロンスク地方で盛んに踊られていた舞曲のことである。やがてその踊りの形態が中央部へ伝わって行き、そこで発展してさらに広まったと考えられる。中庸から急速なテンポで演じられ、3つの舞曲の中では最も速いものとされている。4小節と8小節の弱拍部分にアクセントがくることが多く、明るく跳躍を伴う舞曲である。

達してきたと言える。

2. ショパンとマズルカ

ショパンにとってマズルカは、ポーランドの民族性の表現であるとともに、ショパン自身の魂の発露でもあった。ショパンは、およそ57曲のマズルカを作曲している。出版社によって数は異なるが、ヘンレ版では57曲収められ、パデレフスキ版では58曲（同一曲の異なる楽譜を1曲と数えている。）また、ナショナル・エディションではシリーズA（ショパンの生前中に発表された作品）に、43曲収められ、シリーズB（ショパンの死後発表された作品）に12曲収められている。

ショパンが生まれ育ったジェラゾヴァ・ボーラでは、もの悲しい民謡の多いクーヤヴィアークが存在し、ショパンは母親のユスティーナが歌う民謡を子守唄代わりに聞いて育っている。

また、1824年、14歳の夏に両親とポーランド国内旅行で訪れたシャファルニアやブウォツクでの経験は、若いショパンの胸を踊らせた。それらの地方に伝わる農民達の結婚式や民族音楽を用いる儀式や祭りに接して、大変興味を持ちマズルカ Op.7-4変イ長調を作曲したと言われている。翌1825年にも国内を旅行している。地動説を唱えたコペルニクスの生家のあるトルンや、バルト海の沿岸グダンスクを訪れ、ポーランド伝統の民族音楽にますます惹かれていった。

この時期のショパンの作品の中に、マズルカやポロネーズといった民族色豊かな作品が多く残されているのは、幼少から多感な少年時代にかけて、民族音楽の影響を受けたことの現れだといえる。また、こうした経験や状況が、後のショパンの作風を決定づける要因となることを、我々は作品の中に見いだすことができる。

あらためてショパンが受けた民族音楽の主な影響を整理すると、マズール、クーヤヴィアーク、オベーレクといった3つ舞曲を上手く組み合わせ

て彼独自のスタイル、マズルカとして表現したこと、ドウディなどの民俗色豊かな楽器で演奏されていた低音伴奏音型などの奏法を意識的に作品の中に取り入れたこと、旋律に教会旋法のドリア旋法やリディア旋法を用いることによって民族的な響きと鳥の鳴く声等の自然を作品の中に取り込む工夫をしたこと等があげられる。ショパンの作風の特徴として、和声の平行進行や連続性のある低音伴奏音型。さらに、ショパン作品における独特な表現である「ショパンのハーモニー」、すなわち、属7の和音の中で第5音の代わりに第6音を経過音としてもつ特徴的な和音も、大変民族的な響きがする。

3. 「4つのマズルカ作品33」について

(1) 概要

ショパンの中期の作品には、初期や後期の作品に比べ、ショパンの内面が最も劇的に、また赤裸々にさらけ出されている趣が強い。

マズルカ作品33は、ショパンが27歳～28歳の時に書かれたものである。ショパンは、マリア・ヴォジンスカとの恋が破局した後、男装した女流作家ジョルジュ・サンドと急速に親密になった。1838年には、サンドとマジョルカ島に旅行しているが、この時期に作曲された中期の傑作である。

この作品は、出版社の意図により、出版される時に曲の順番を入れ替えて出版された。現在、楽譜上でみる曲の順番は、第1曲嬰ト短調、第2曲ニ長調、第3曲ハ長調、第4曲口短調というのが一般的になっている。しかし、最初にショパンが示した曲の順番は、第1曲嬰ト短調、第2曲ハ長調、第3曲ニ長調、第4曲口短調で、2曲目と3曲目が入れ替えてあった。

図表 マズルカ作品33の概要

作 曲	1837～1838年
出 版	1838年
献 呈	ローザ・モストフスカ伯爵令嬢

(2) 曲の分析と解釈

曲の分析、解釈にあたり、本論ではヘンレ版（原典版）をベースとして使用する。従来は、パデレフスキ版が使用されることが多かったが、近年、作曲者の意図が忠実に反映されているのは原典版であるという考えにより、原典版が用いられることが多くなっている。これにならい、ここでは原典版を掲載するが、演奏者の立場としては、必ずしも原典版がすべて正しいとは考えないので、楽譜の中で、適宜、パデレフスキ版やナショナル版の表記、表現も提示した。

マズルカ作品33は、中期の中でも最もポピュラーで、広く親しまれている。

第1曲は、もの悲しいクーヤヴィアークから始まり、途中から力強いマズーレクが希望となって現れる大変印象的な構成である。曲の冒頭に *Mesto*（ヘンレ版、ナショナルエディションに同じ）と表示してあるが、パデレフスキ版では、*Lento* と表示されている。

第2曲は、有名なバレエ音楽「レ・シルフィード」の舞曲に取り入れられている快活なテンポのオバーレク。ゆるやかにアラベスク調に上下するメロディーラインは舞曲による回転を表している。この曲のテーマは、L. コズベック⁽¹⁾によれば、最初は、*p*で繊細かつ優雅に、冷静さと均衡を保って演奏し、そして、再びテーマが現れたら、*f*で生活感あふれる賑やかな様を伸び伸びと表現する。

第3曲は、ゆったりとしたテンポで踊るクーヤヴィアーク。この曲の記述によると、この曲をショパンが演奏していた時、部屋の中で聞いていた作曲家でショパンと親交のあったマイヤベーアは4分の2拍子だと言い張った。しかしショパンが怒りをあらわにして、4分の3拍子だと反論し、しばらく口論となったという有名なエピソードがある。美しいテーマの中に、アクセントが効果的に現れる。このアクセントは表現上の大きさ

(1) 国立ワルシャワ・ショパン音楽院教授、武蔵野音楽大学元客員教授。筆者がポーランド留学するきっかけとなった恩師。

を表すもので、テヌートで、充分たっぷりと歌い上げるように演奏する。

A. ヤシンスキ⁽²⁾ は、レッスンの時、「この曲は、女性の踊りです。優雅に弾きましょう」と言って、自身の胸を反らせて、腰に手をあて体をゆっくりと左右にねじりながら踊ってくれた。大変貴重なレッスンであった。

第4曲は、クーヤヴィアークが豊かに鳴り響き、途中勇壮なマズーレクでの踊りの展開となる大変壮大な内容の曲である。全体として、悲哀を帯びたテーマを切々と歌い上げ、テンポ・ルバートしながら、オクターヴ進行や転調により曲が大胆に発展していく。ダイナミックな構成の曲である。

(2) 国立カトヴィッツ音楽院教授。第9回ワルシャワ・ショパン国際コンクール優勝者クリスチャン・ツィメルマンの師。現在、ワルシャワ・ショパン国際コンクール審査員。

4 MAZURKAS

dédiées à M^{lle} Rose Mostowska

3部形式 ・もの悲しいクーヤヴィアークで始まるテーマ ・書き加えたスラーはナショナル版による
・スラーを意識してメロディーラインを歌うように演奏

ナショナル版では長いアクセントになっている。
この音に気持ちを込めてフレーズを一息に持つていく。

第1部 (パデレフスキ版ではLento)
Mesto

Komponiert 1837/38

Opus 33 Nr. 1

22.

パデレフスキ版では(P)

パデレフスキ版、ナショナル版ではタイ。

深い音

軽く響かせて。 スタッカートは軽く。

この和音の響きが
寂しさ、切なさを表現。

メロディーを意識して。

パデレフスキ版。

パデレフスキ版。

パデレフスキ版にはない。

mf

オクターブの
差を意識。

第2部 ここからマズールの運動的なリズムを
意識し大きくダイナミックに演奏。

10

mp

パデレフスキ版。

H: $\frac{V}{V_7}$ $\frac{V}{V_7}$

高い方の問いかけに対し、
オクターブ下で答えるように。

ナショナル版、パデレフスキ版
ではタイ。

和音を豊かに響かせる。

f

P

f

$\frac{V}{V_7}$ $\frac{V}{V_7}$

ショパンの4つのマズルカ Op.33とその背景について

3部形式 ・明るいオペレックから開始

・立ち上がりから華やかに、
メロディーラインを大事に響かせて
・肘を硬くしないで脱力して演奏

II

Komponiert 1837/38

ナショナル版では長いアクセント。
たっぷり、深い音で。
Opus 33 Nr. 2

第1部 Vivace

23.

拍の頭にアクセント。トリルと3連符リズム注意。

合わせる。

メロディー意識し、アクセント効果的に。 V_7 * I * V_7 * I *

ナショナル版は長い。

メロディーライン、表情を変えて。 pp

スタッカートのバスをよく響かせる。 IV_7 * II * V_7 *

リズム注意。

和音はメロディーに溶け込む。 *

リズム注意。

ナショナル版は長い。メロディーライン、たっぷり。 *

リズム注意。

ナショナル版は長い。

リズム注意。

ナショナル版は長い。 A * I * V_7 *

リズム注意。

メロディー大事に、和音は溶け込む。 *

パデレフスキ版、ナショナル版にはないが、次のテーマを考えると、このような表情づけも効果的。

- 1回目は♭で繊細かつ優雅に冷静さと均衡を保って演奏。
2回目はfで生活感あふれる暖やかな様を伸び伸びと表現する。

65 *p/f*

71 *fis: V₇ I* *A: V₇ I²* リズムの違いに注意。

76 ナショナル版は長い。 *D: V₇ I* リズムに注意。 *V₇ I* ナショナル版は長い。 *pp* 2回目は。

82 *V₇ I IV₇ V₇ I* ナショナル版は長い。 *メロディーライン、音量と表情を変えて。*

88 ナショナル版は長い。 *メロディーラインでひびやかにたづね* *V₇ I* ナショナル版は長い。

94 *A: I* *V₇ I* *pp* *IV₇ II V₇ I* *オクターブ下のa音よく響かせ*

ショパンの4つのマズルカ Op.33とその背景について

3部形式 ・明るい曲調のクーヤヴィアーク
 ・急がないで丁寧に
 メロディーを歌うように演奏

III

Komponiert 1837/38

・2拍目の長いアクセントはすべてナショナル版による。
 ・ぶつけないでアクセントに気持ちを乗せるように
 テヌートで演奏
 ・3、4段目のスラーはナショナル版

第1部

アウフタクト長めに意識。 ナショナル版 フレーズ感覚に。

Opus 33 Nr. 3

24. *Simplice* バデレフスキ版

ナショナル版では2拍目に
長めのアクセント

5 やわらかに聲を感じてゆったりと歌う。 バデレフスキ版

ハモニーの変化を
やわらかに感じて。

ナショナル版では
両手2声ずつ演奏
するよう指示。

10 バデレフスキ版

バデレフスキ版

15 第2部 メロディーラインは大きくたっぷり、優雅に歌う。

大事に

As: IV_7

20 この音に気持ちを乗せるように。

バデレフスキ版

六度の重音は上声部のメロディーラインを
意識してフレーズ感をもって演奏する。

・ゆったりと歌うように演奏

Komponiert 1837/38

・9-10、11-12小筋、21-22、23-24小筋

33-34、35-36小節のスラーはパデレフ

Opus 33 Nr. 4

第1部

Opus 33 Nr. 4

深い音で

284

おわりに

マズルカの由来やポーランドの言語、ショパンの青年時代などを踏まえて、マズルカ Op.33の楽譜を複数検証することにより、ショパンがどのような背景からこれらの曲を作曲し、ショパン自身がどのような心情をもって演奏していたのか、当時の姿に一步でも近づけたのではないかと考える。

ショパンはマズルカを、土俗的、民族的な形態から、洗練された独特の芸術作品に昇華した。マズルカが世界中に広まり、どこでも演奏されるようになったことは、大変重要なことである。

5年に1度、ワルシャワで開かれる、世界で最も権威のあるショパン国際コンクールでは、必ず予選の課題曲にマズルカが取り上げられている。このマズルカの演奏によって、世界的に活躍できるピアニストになれるか否かの分かれ道になるともいえる。特にマズルカにおいて優れた演奏をした者にだけ授与されるマズルカ賞は、マズルカの持つ意味の重大さを表している。

マズルカを想うショパンの心情は、祖国やそこに生きる人々、父母、姉妹を慕う郷愁という言葉がふさわしい。

20歳の時にポーランドを後にし、ウィーンからパリで過ごした亡命生活の中で、日々マズルカを書いていたショパンは、常にポーランドに思いを馳せていた。ポーランドの空気や空、森の色すべてが、ショパンのマズルカには凝縮されているのである。ショパンにとってマズルカを作曲することは、ショパンの精神、魂を解放させ自由に意のままに表現することであった。失意に終わったウィーン時代からパリで華やかなサロンデビューを果たし、そこで生活している間もずっとショパンの本当の心の支えであり、よりどころであった。

留学した1年目の年に、私はこの4つのマズルカ Op.33を演奏曲目の中に入れてリサイタルを行った。限られた期間の中で、課題をこなすこと

に没頭していた私に、音楽の真の意味を忘れさせないようにと、L. コズベック先生は、あらゆる所に連れて行ったり、いろいろな場所で演奏させてくださった。現在私の住んでいる日本の関東地方よりずっと北に位置するポーランドでは、秋～冬にかけての日没が大変早い。少し遅めの昼食を食べて3時頃にはもう夕暮れである。そして、あっという間に真っ暗な夜になってしまう。当初は驚きと何ともいえない悲しさがあったが、その頃から演奏会に出かけるようになり、国立フィルハーモニーホール、テアトル・ヴィエルキやスタジオ S1（エスイエデン）等に、器楽やオペラ、室内楽、シンフォニーなど様々な音楽を3日に1度は聞きに出かけ、いろいろな音楽に触れる機会をもてた。また、入国して3日間のうちに物価が10倍に上がるという、ひどいインフレも経験した。その中で、この国に生きる人々の生活感や生き様を感じとることが出来たことは、大変貴重な経験だったと思える。

今回マズルカを研究することによって、ショパンのマズルカに込められた内面性に少しだが近づけたと思う。今後こうした取り組みを続けて行きたい。

参考文献

○楽譜

パデレフスキ版

I.J.Paderewski, L.Bronarski, J.Turczynski,
“Fryderyk chopin complete works X Mazurkas”,
Instytut Fryderyka Chopina Polskie Wydawnictwo Muzyczne, (1991, Cracow)

ナショナルエディション（ナショナル版）

Jan Ekier, “Fryderyk Chopin Mazurki”, Seria A. Utwory Wydane Za Zycia Chopina.Tom IV, Fundacja wydania Narodowego Polskie Wydawnictwo Muzyczne SA Krakow, (2004)

ヘンレ版（原典版）

Ewald Zimmermann, “Chopin Urtext Mazurken”, G.Henle Verlag, (1979, Munchen)

○文献

Tadeusz Andrzej Zielinski, "Chopin Zycie I droga tworcza", Polskie Wydawnictwo Muzyczne, 1993

田村 進著, 「ポーランド音楽史」, 雄山閣出版, 1980

ウィリアム・アトウッド著 横溝 亮一訳, 「ピアニスト・ショパン 上・下」, 東京音楽社, 1991

遠山一行著, 「ショパン カラー版作曲家の生涯」, 新潮社, 1988